【研究ノート】

宮城県南三陸町において自発的内発的「関係人口づくり」をまなぶ

How and What Should We Learn about “Inbounder with Connected Mind” Projects, Kankeijinko-Tsukuri, in the Disaster-Recovering Area?

河東　仁
KAWATO Masashi

はじめに

本稿は、筆者が宮城県南三陸町へ如何なることを目的として通い、その際どのような心構えを重視し、実際にどのように動き回り、現時点での成果として何があるのか、それらを綜合的に省察することを目的としている。ただし以下に掲載する拙稿は、基本的には、2021年3月、本学部全体が取り組んできた10年にわたる活動の報告集『いのちの尊厳のために～東日本大震災復興支援プロジェクト 10年間の記録～』[1)]に所収されている拙文を大半とし、それに今回、いわゆる「FEC自給圏」をめぐる記述を加筆した形をとる。

まず上記報告集は、プライバシーなどの問題もあり、きわめて限られた部数しか印刷製本されえず、そもそもネットにて公開するべきではないと判断された。しかし拙文の部分は、すでに関係者に許可を頂いており、むしろ一般に公開すべき事柄を多々含んでいると自負している。

また加筆したことにより二重投稿にはならないと判断するが、「原著論文」（オリジナルな論文）」とはせず、「研究ノート」の枠にて掲載する次第である。

なお加筆部分にて詳述するが、FEC自給圏は、Foods、Energy、そしてhuman Careの「地産地消」を目指さんとする概念で、1932年に生をうけた内橋克人が、まさに新自由主義経済が財界等によって日本へ導入されるのを危惧し、1995年の時点にて提唱したものである。そして内橋は、2021年9月、新型コロナ禍にある日本さらには世界を心配しながら、この世を去った。それゆえ、上記報告論文に、南三陸町における「FEC自給圏」が自発的内発的に紡ぎ出されてゆく経緯を加筆して本紀要に掲載したい。

そしてまずは、英題にある “How and What” のうち、“How” について語るため、今からほぼ半世紀前に遡った筆者自身の学部生時代のことから話を始めてみたい。

1．善意による地域支援のもちうる《侵襲性》そして《搾取性》

いきなり形容矛盾のような章題になってしまった。実は筆者は、学部1年次から4年次まで足かけ5年、2つの課外活動に携わった。1つは学生セツルメントのサークル員（セツラー）、いま1つは学生自治会執行部における常任委員としての活動である。と言ってしかるべき思想性があった訳ではない。深層心理学を学ばんとしていただけに、マルクスは人間心理に無知と言い張り、否定的な立ち位置をとっていたからである。

ではそれなのに何故こうした活動に関わったのかというと、地域住民、学生の側から主体的かつボトムアップ的に当該地域や大学を活性化することはきわめて重要との思いを有していたからである。またこの頃は、鶴見和子（1918－2006）らの「内発的発展論」は姿を見せる前夜であったが、いわばこの時代の雰囲気のなかに、他者からの働きかけよりも内発性・自発性を重視せんとする考え方の萌芽が存在していたのである。

このうちセツルメント（settlement）とは、簡潔に言えば、医療従事者や法律家あるいは「宗教家や学生などが、都市の比較的貧しい地域に〔定住（セツルメント）したり定期的に訪れ〕宿泊所、授産所、保育所、学習塾などを設け、地域住民の生活や文化の向上のために援助をする社会事業、またはその施設をいう」[2)]。そして1970年代には、学生のみで活動するスタイルが多くなり、学生セツルメントとの呼称が定着、目的も「ボランティア」「支援」よりは社会課題を体験的に「学ぶ」ことに力点が置かれるようになっていた。

具体的な活動としては、高齢者世帯へ伺って介護を手伝いながら、高齢者問題について学ぶ。生活保護受給者の自宅を訪ね、生活の実際や制度的な矛盾を肌で感じ取る。中学生を団地集会所に集め、数学や英語を教えたり、彼ら彼女らの姉や兄として生き方などについての話し合いをする。子どもパートにおいても、同様に一緒に勉強し遊ぶことで、共働きで子どもだけとなる時間帯に相手をする。こうした内容からなっていた。

そして、そもそもこうした方々が多く集まっている当該地区の抱える社会課題について実体験的に学ぶ。こういったことが、学生セツルメントの主たる活動内容であった。

学生セツルメントは、日本の経済状況が飛躍的に向上するにつれ、次第にサークルとしての活動を終えていった。だが極めて残念なことに、現在の長期にわたる経済不況、それに輪を掛ける新型コロナ禍などにより生活格差が広がっており、その存在意義が見直されるようになった。

またボランティア元年とも呼ばれる、1月17日に阪神淡路大震災の起きた1995年ごろから、学生たちの間にも災害が起こるたびに支援に出向くベクトルが内発的に生じるようになった。さらに2011年3月11日の東日本大震災においては、被災規模の甚大さもあり、特定の地域へ一定の学生グループが定期的に訪れ、寄り添って支援したり、子どもたちに勉強を教えるといった、かつての学生セツルメント的な活動が幅広く展開されだした。

ただし筆者としては、そうした動きを非常に高く評価すると同時に、かつて自身が携わったときに感じた学生セツルメント活動への《違和感》が改めて思い起こされたことをここに書き記しておく。そしてそれが本章のタイトルに、「善意」についで「侵襲性」「搾取性」という語句を並

べた理由である。

このうち後者から説明する。そもそもこれは、訪問地を学術的な調査研究の対象とする場合に生ずるもので、主として人類学領域から問題提起された。すなわち対象地にて日々の生活を営む方々にとって、自分たちのところへやってきて、多少の手伝いはするが、最終的にそこでの応対が記録されて論文という名の業績となってしまうことへの違和感、結局のところ何しに来たんだ感、裏切られた感という問題である。つまり自分たちは論文の素材に過ぎなかったのか感が残る、その状況を《搾取性》(exploitation)と呼ぶのである。

実際に、学生たちとともに被災した地域をまわっているさい車を停めるたびに、たちまち2〜3名の人間が駆け寄り、大学教員の名刺をさしだすや、「先生はどこをフィールドにされているのですか？　情報を交換しませんか」という申し出を、ことに2013年ぐらいまで頻回に耳にした。少しでも多くの業績を作成せねばならぬ大学システムの問題もあるが、やはりこの《搾取性》の問題は、今後も事あるごとに取り沙汰される必要があろう。

これに対して《侵襲性》(invasiveness)、これはより微妙かつ気付きにくい問題である。たとえば被災した地で生きている若者にとって、同年代が大学生として訪れてくるのは楽しいことである。しかし同時に同じ年齢でありながら、どうして、なぜ、如何なる理由で「寄り添う側」と「寄り添われる側」とに分かれるの？という根源的な疑問が湧出してくる可能性がある。また年齢が異なっている園児や小中校の生徒にとって、大学のお姉さんお兄さんが来て一緒に遊んだり勉強を教えてくれることは、すごく嬉しい。しかし長い目で見ると、いつかこの関係には終わりがくる。その終わり方次第では、子どもたちの心にかえって大きな傷を残してしまう可能性がある。なんであいつら来たんだ。可哀想だったからかなぁ。そんなんだったら初めっから来んなよ。

話をセツルメントに戻すと、とある中学3年生の姿が見えないため仲間に聞くと、どこどこで《アンパン》やっているとのこと。慌てて駆けつけると逃げ出すが、《アンパン》のため足がふらつく。そこで話し合うと、たとえば、「あんたらはいいよな、いい大学はいって、いい会社いくんだろ。だけどおれらはさ、来年から働いてこき使われるんだぜ。やってらんねぇよ」という言葉を投げつけてきた――トロンとした悲しい目で。この場面は今でも克明に覚えている。

支援する側と支援される側とには歴然とした《非対称性》(asymmetry) がある。それをしっかりと把握しておかないと、必要以上に相手の心を傷つけてしまうことになる。善意からくる《侵襲性》とは、そういったニュアンスの言葉である。

2．宮城県南三陸町

地域での活動をめぐり、こうした思いを有する一方で、発災直後に理由は言葉で説明できないが、被災した地域へ「行くのが当然でしょ」という思いが自然に生じたことも確かである。だがどこへどのような形で、ということはまったく見えなかった。そこでまずは2011年5月半ば、福島県の沿岸部を第一原発の近くまで車にて北上、災害の実際を、可能な限り体感した。ついで6

月初め、旧知のJAの方々と車に同乗、佐藤幸也さん（宮城女子学院大学教授、当時）の案内のもと、岩手県大槌町から海岸線を南下する形で宮城県南三陸町・石巻市まで、各自治体の（仮）庁舎やJA支部を中心に訪問した。もちろん現地の職員の方々にとって、1分1秒でも被災した方々への対応に用いたいとの思いのあることを重々認識しての訪問であった。

そのさい各地で見聞きしたことは、一個人の体験談として残す義務があると思うが、ここはとある人物との出会いについて語り、論を先へ進めたい。それは宮城県南三陸町入谷（いりや）地区の阿部忠義公民館長（当時）との、JA入谷支部の前での偶然の出会い（立ち話）である。

ここで立ち話をしている方々の輪に入ったとき、忠義さんから、同年7月中旬には始まる、入谷地区の仮設住宅地への被災した方々の受け容れ策をめぐる具体案をお聴きした。南三陸町では沿岸部にある数少ない平野部は津波の甚大な被害を受け、中山間地区ゆえ津波による物理的な被害の少なかった入谷地区に、かなりの数の仮設住宅が建設されることになっていた。そして一次避難所では基本的に震災前の集落単位のコミュニティが保たれていたが、仮設住宅に移転するさいには —— 公平性を保つため抽選制を採り入れるなどにより —— 集落単位が保証されえず、新たなコミュニティ、絆、人の輪を住宅地ごとに紡ぎ直す必要が想定されたのである。

そして筆者の関心を最も惹いたのが、「なかよし農園」を造るという忠義さんの言葉だった。つまり一緒に作物を育てることで、それまで知らない者同士だった入居者がお互いに知り合う。また入居した人びとが、入谷の地域に住む人びととも知り合うようになるのでは、というアイデアである。

ちなみに農作業を介してそれに関与する人びとの間に人間関係を構築してゆく活動は、コミュニティガーデン(community-garden)と呼ばれ[3)]、1973年、ニューヨーク市の衰退した地区で犯罪の温床となりがちな空き地に、リズ・クリスティ（Liz Christy）が花を植える作業を始め、そこに多数の人びとが参加しだし、やがて一つのコミュニティが形成されたことに始まるとされる。筆者もこの活動を体験的に学ぶため、新座キャンパスの一画に、小さな畑をゼミ活動の一環としてつくった。それだけに、入谷におけるこの試みに大きな感銘を受け、こうした発想を内発的に産み出す地域にて、コミュニティづくりを学生達とともに実体験的に学びたいと思うに到った。これが筆者の南三陸町における活動のスタート時の思いであり、願いであった。ちなみに

Fig. 1　なかよし農園

ここに転載するチラシは、翌2012年に、公民館より出されたものである。

なおこの時の訪問以降、2012年度からゼミ等にて活動する準備のため、何度か入谷公民館を訪れた。だが「なかよし農園」のみならず、数々の震災復興グッズを開発し生産販売する「Yes工房」の起ち上げと運営、諸大学と提携して学生達を招いて町の活気づけをはかる宿泊研修施設「いりやど」〔入谷の宿〕の建造といった、まさに自立的-内発的と言うべき復興活動を案出展開して、多忙を極める忠義さんとは、ほとんどの場合、擦れ違いになってしまった。それでいて毎回、必ず町のどこかでひょっこりと遭遇する。このことを今でも懐かしく覚えている。

そして彼からは、宮城県庁福祉課を発災直後に自ら辞して南三陸町の福祉アドバイザーとなった本間照雄さんを紹介していただき、さらに女性目線からの復興支援を継続的におこなうため全国からIターンした方々からなるNPO「ウィメンズアイ」等など、南三陸各地でさまざまな自発的内発的復興活動をされている方々との面識をもつに到った。また同町民であり宮城大学の南三陸復興ステーションの統括リーダー鈴木清美さんとも知り合い、彼からも数多くのキーパーソンを紹介していただいた。

これらのうちYes工房、NPOウィメンズアイ、宮城大学復興ステーションの当時の様相を、QRコードにて紹介しておく。

QR1　Yes工房　　QR2　ウィメンズアイ　　QR3 復興ステーション

こうして南三陸町では、立教大学コミュニティ福祉学部の復興支援推進室のバックアップを受けながら、1年につき5回ほど土日の1泊2日、全学部への呼びかけに応じた学生たち5〜6名程で町を訪れ、年に1度、2泊3日、20名前後でゼミ合宿をおこない、これらコミュニティを紡ぎ直す自発的内発的活動を実体験的に学ぶ、こういうスタイルが生まれた。

3．南三陸町プログラムの紹介

ここでは、コミュニティ紡ぎ直しの内発的な活動をめぐり、学生達とともに参加したものを幾つか紹介したい。ただし活動を個別的にとりあげる前に、おおよそのイメージをつかんで頂くため、後述する成果物 —— 関係人口招来パンフレット『南三陸町オデッティア』—— の1頁を転載しておく。

Fig. 2　おでって風景

花咲か爺さま㊐花見山

ワカメの湯通し

水産物商品袋のシール貼り

伐採した樹木の搬出

芯抜き

長ネギを束ねる㊐農工房

急斜面での根っこ抜き

種扶みの前の場掃除

カボチャ畑の整備㊐農工房

植えた苗木に堆肥をまく

新わかめのしゃぶしゃぶ

ヒツジとの遊戯
㊐さとうみファーム

1）北の恋人岬

2018年7月27日（金）、南三陸町志津川地区の袖浜（そでは ま）にて、北の恋人岬の鐘の完成披露祝典がなされた。かつてこの岬には公園があり、ここから日の出を見たカップルは結ばれるとの言い伝えがあった。しかしいつしか忘れ去られ、木々や草花に覆われてしまった。それを惜しむ佐藤良夫さんが、友人たち2〜3名と伐採作業から始め、地表を整備、徐々に公園化する作業を3〜4年ほど進めていた。そして話を聞いた人びとが次第に手伝いに集まり、さらには鐘の寄贈、樹木や花の寄贈を受け、2018年の夏に全体の第一次整備が終わり、鐘の除幕式が執り行われた。

QR4　北の恋人岬

それ以降も、つながりのできた全国各地の人びとからの寄附によって東屋（あずまや）を改修するなど、第二次整備が着々と進められ、COVID-19禍のなかでもフェイスブック等を介して、全国の人びととの縁を繋ぐなど、まさしく草の根活動による新しい観光名所が誕生した。なお公園内には、立教大学寄贈の樹を3本、ゼミ生たちが2019年9月に植えた。

2）花見山プロジェクト

25年ほど前、入谷地区にある「ばば山」との愛称をもつ小さな山を観光名所「桃源郷」にしようとのプロジェクトが立案された。しかしそれに費やされる労力に見合うだけの効果が期待できるのかといった観点から、そのまま手つかずになっていた。しかし2015年夏から、バイオマスシステムの導入など、さまざまな試みをなしている阿部勝善さんが中心となって、「花見山」プロジェクトが開始された。

Fig. 3　植樹

このプロジェクトの基本的な考え方は、植樹はむろん、地ならしから毎年の草取りなどの維持管理も、当地を訪れる人びと、ことに若者の手を借りておこなう。そして自分の植えた樹が花を咲かすようになれば、必ずや毎年のごとく花見に来てくれるだろうということにある。

これを前述の阿部忠義さんたちは「交流人口」の増大と位置づけていたが、後述する「関係人口」とほぼ軌を一にすることは指摘するまでもない。しかも北の恋人岬と同様に、内閣府が「関係人口」なる概念を提唱するより前、内発的自発的に湧出してきた、コミュニティ活性化プロジェクトの好個の例と呼びうるものである。

QR5　花見山

3）ワカメ養殖おでって

「おでって」とは、お手伝いを意味するこの地方の言葉である。そして先に掲載した写真集の左の段は「花見山」にて学生たちが「おでって」する様子、中段は歌津地区にて、浅野健仁君た

ちのお宅にて、ワカメ養殖の「おでって」をしたときのものである。

浅野君とは、2012年、歌津地区にある平成の森仮設住宅地の集会所「あづま～れ」にて出会って以来の知り合いで ── 当時は、高校を卒業して間もないころ ──、浜辺に自家専用の作業所が復活してから、学生を作業に呼んでもらえるようになった。そしてそのとき、非常に素晴らしい言葉を聴いたので、ここに記しておく。それは作業の合間にお茶の接待だけでなく、昼食にワカメや魚介類を手作りでご馳走してもらったのだが、そのとき、「これまで様々な方に助けていただいた。だから御礼が出来るようになった今、お世話になった方々への代表として、学生のみなさんに振る舞いたい」と言ってくれた。実に嬉しい一瞬であった。

このことに触れるのは、彼の言葉を「搾取」せんがためではなく、こうした支援する側とされる側との非対称性について改めて気付かされたことを記したいがためである。

4）さとうみファームとワカメ羊

以上が発災以前から南三陸町で暮らしていた方々による復興プロジェクトのごく一部であるのに対して、震災を機にいわゆるＩターンの形で移住し、復興活動を展開している方々も数多くいる。先に触れたNPOウィメンズアイの方々もそうである。

そして、さとうみファームの主宰者である金藤克也さんは、神奈川県から出かけてきては自然との共生を体験的に学ぶ場として、ヒツジ牧場を徐々に整え、本格的に始動するとともに居をうつした。並行して、子どもたちに海の素晴らしさ、恐ろしさを身を以て体験するためのシーカヤック教室も開催している。「山は海の恋人」という言葉があるように、山を整備し、河川の流れを潤滑にすることによって、ミネラルを始めとするさまざまな滋養分が海に注がれる。シーカヤックは、小さな川が入江へ流れ込む様を、海の側から視ることも目的の１つとしている。

さらにQR6の記事に示されているように、刈ったヒツジの毛を洗い、汚れを丁寧にとったうえで糸に紡ぎ、織りあげ、藍などで手染めするなどの事業も展開されている。

QR6　さとうみファーム

またここでも、ヒツジの世話、なかでも小屋に積もった“落としもの”を掃除したり、発酵し堆肥化した“落としもの”を牧場に撒く。こういった作業を、外から来た人びとも「おでって」できるなど、人と人との「縁」をつなげる場として機能している。そのためファーム内にBBQ場が設置されており、午前中にヒツジの世話をし、昼に、出荷の前に発酵したワカメを飼料として食べ、柔らかく深みのある味わいを醸し出すワカメ羊の焼肉を楽しむことができる。

5）恩送りファーム

Yes工房があるならNo工房もあってよいのではとの発想から、農工房も2014年に立ち上げられた。「おでって」の農作業版である。ただし基本的コンセプトとして、「恩送り」が中核に据えられている。「恩」を返すのもよいが、受けた恩を他の人へ送ってはという提案である。

大づかみに言えば、自分が手植えした苗などはすぐに成長する筈がない。だがここへ「おでって」に行けば、前に訪れた人の作物が育っているので、それをいただくというシステムである。もちろん工房長の阿部博之さんたちが日々維持管理しているからこそ、成り立っている。詳細については、QR7を参照して頂ければ幸いである。

QR7　No工房

また以上見てきたように、自発性内発性にくわえ、ダジャレもあってどこかホンワカとしたプログラムがあれこれ展開されているところが、コミュニティの紡ぎ直しを学ぶ場としての南三陸町の特徴と思われる。付け加えておくと、Yes工房との名称も、廃校となった町立入谷中学の校舎を震災後に工房として再利用したさい、廃（はい）校＋工房で、Yes工房と命名された。

6）戸倉っこ牡蠣

歌津地区、志津川地区とともに志津川湾を形作る戸倉地区にも大小さまざまな河川が入江に流れ込み、滋養分豊かな水を海に注ぎ込んでいる。

しかし養殖イカダの密集などの要因により、発災以前に牡蠣をはじめ養殖の生産量が減少傾向にあった。そこで戸倉地区では、漁業従事者が復旧復興作業の合間を縫って何度も話し合いを重ね、ついにイカダの総量を3分の1に減らす合意形成をなし遂げた。その結果は大きく、震災前は3年かかっていた牡蠣の成長が1年で達成されるまでになった。

この地区ではまた、森と海の関係を改善するため、林産業をめぐり環境保全をはかる国際的非営利組織FSC® (Forest Stewardship Council、森林管理協議会）の認証を2015年5月1日に取得、2016年5月18日には、宮城県漁協志津川支所戸倉出張所が、海環境の保全を目指す、水産業従事者と地域住民との誠実な関係構築を求める国際的なASC（Aquaculture Stewardship Council、水産養殖管理協議会）の認証を日本で最初に得て、山、川、海などの自然と、居住者たちおよび生業（なりわい）とが共存する地域へと進もうとしている。

QR8　戸倉っこ牡蠣

また、若きドキュメンタリー映画の監督我妻和樹さんが戸倉地区の波伝谷（はでんや）漁港を取り巻く集落をめぐり、まさに震災が起こる直前までの日々の様子を描いた『波伝谷に生きる人びと』、この地におけるコミュニティの結節点の1つ、伝統行事の「お獅子（すす）さま」の復活過程を描いた『願いと揺らぎ』『春祈禱』もまた、南三陸での学びを深めるために必見のものとなっている。ことに『願いと揺らぎ』には、震災時に漁船の大半を失ったため会社組織をつくって共同で養殖、漁獲作業をおこなったさいに生じた様々な摩擦、「お獅子さま」を復活する過程での長老組と若手組との対立、それを乗り越える要因となる女性陣の動きなどが、克明に撮しとられ、コミュニティを紡ぎ直すさいの生々しい現実の一端を感じ取ることができる。さらに記すとこの作品においては、「撮る側」

QR9　願いと揺らぎ

と「撮られる側」との「非対称性」が溶け去ってしまうシーンも登場している。

いずれにせよ、人の輪の紡ぎ直しのみならず、自然との共生の仕方、それも自発的内発的な展開の仕方を学ぶこともできる。それが南三陸町のさまざまなプロジェクトの特徴である。

7）被災者生活支援員制度

以上、「民草（Grassroots）からの」復旧復興プログラムを駆け足で紹介してきた。そして当然のことながら同町では、「公からの」コミュニティ再編のための復旧復興活動も展開されている。その中でも特筆すべきものが、「被災者生活支援員制度」である。これは国からの助成金によって立ち上げられた組織で、社会福祉協議会が中核となって形成され、その点では、他の市町村と同様である。ただし同町では、他の地とは異なり、最初から独自のコンセプトをもって設計され運営された。具体的には、他の市町村では、主として看護師、保健師、ソーシャルワーカー、カウンセラーなどヒューマンケアの専門職を招聘してスタートし運営した。

ところが南三陸町では、「被災者のことを一番良く分かるのは被災者であり、彼女ら彼らは生活の専門家である」との考えに基づき、100名の被災した一般の方々を支援員として雇用し、いわゆるプロフェッショナルは少数に留めた。そうして100名の支援員が毎日の朝晩、仮設住居を一軒一軒訪問して種々の生活状況を聴き取り、また生活のプロとして察知する。そうして得た情報をその日のうちに本部へ電子メールにて報告、それを少数のヒューマンケアのプロが整理し、専門的なケアが必要か否かをトリアージする。さらに行政的な動きが要請される場合には、役場のしかるべき部署へ情報が送られる、こういうシステムである。

そしてこのシステムを案出し、個人情報の保護などの厳格な研修をおこない指揮をとったのが、冒頭に登場した本間照雄さん[4]（南三陸町福祉アドバイザー、当時）および町役場に勤める高橋一清（かずきよ）さんである。

なお、100名の支援員を雇用するにあたって、その原資が政府からの助成金である以上、支給が終了すれば必然的に規模を縮小せざるを得なくなる。だが当初よりそれを前提としての100名であり、制度の終了後、多くの支援員はそれぞれの地域にて日々の生活を送るようになる。しかし彼女ら彼らは、コミュニティを紡ぎ直すプロとして地域へ戻ってゆく。そうしてやがて、草の根から自発的内発的にコミュニティを紡ぎ、活性化する「人財」となる。これが当初からの本間さんたちの計画であった。

そして筆者は、本間さんからの依頼により、生活支援員たちの活動の様子をビデオにて撮影する役割も担った。彼は、「大学の先生は何の役にも立たない。それどころか偉そうに言いたいことだけ言って、すぐに帰ってしまう」との持論を公言されていた。それだけに、アドバイスなど出来ようはずもなく、ただひたすら学生たちとこれまで紹介してきたプログラムに参加するだけのスタイルが、この依頼につながったのだと、今でも確信している。

なお被災者生活支援員センターは現在、社会福祉協議会を中心に受け継がれ、「結（ゆい）の里」という介護－地域交流の施設・仕組みへと発展し、復興公営住宅をはじめ地域住民からの内発的自発

的な発案による様々な企画が展開されている。

8）成果物と今後の課題

ただしそのビデオであるが、編集能力の未熟さおよび時間的余裕のなさ、加えてCOVID-19禍のため未だに完成に到っていない。だがビデオの解説書――QR10「志縁の輪ができるまで（は）」に関しては、2019年度に作成し印刷済みである[5]。また試作品を、南三陸町の社会福祉協議会等に納めてある。とはいえ、早急に完成にまで漕ぎ付かなければならないことは確かである。

QR10　志縁の輪

QR11　オデッティア

そして言い訳にはならぬが、並行して、あるパンフレット――QR11「南三陸オデッティア」――を作成し、紙媒体の印刷版を同町観光協会などに寄贈した[6]。

このパンフレットの主眼は、都会部に住む人びとが週末ごとに、あるいは月末ごと、場合によっては季節の変わり目ごとに、南三陸へ来訪し、知り合いになった漁師さんの家で旧交を温めながら魚介藻類の養殖を「おでって」する、観光客以上、移住者未満の「関係人口」[7]を招来する一助となればとの思いから作成した。そのため自分が「おでって」している作業の意味をよりよく分かるよう、ワカメ、ホヤ、マガキ、ホタテ、銀ザケの養殖工程をイラスト入りで解説している。

つまりは筆者が他者として訪れることによって生じかねない《搾取》を避け、またすでに形成されている内発的復興プログラムを《侵襲》することなく、むしろ促進剤として機能してくれればと願っての成果物である。

またこれは本間さんからの依頼に応えようとするものでもあり、以下の目的をも同時に有している。

ⅰ．沿岸部から内陸部へ移らざるを得なかった、あるいは移ることを決意した方々へ配布することで、子どもや孫、ひ孫たちに、海での生活について語るきっかけになれば。

ⅱ．「大学の先生は、何か偉そうなことを口先で言うだけで、すぐに帰ってしまう。」という批判への、1つのアンサー。

ⅲ．と言うより、お世話になり、あれこれ教わったことへの御礼。

以上、成果物として、関係人口招来パンフレット「南三陸町オデッティア」を紹介した。そして今後のことにも触れておくと、2019年度半ばから、今1つのプロジェクトを始動した。それは「浜呼称（はまこしょう）」由来集の作成である。浜呼称とは、海辺にある小島、岩礁、暗礁、入江、洞窟など地標となるものの昔からの呼び名であり、その1つ1つにそう呼ばれる由来譚（たん）がある。だが漁船のレーダーやGPSが発達し、地上でも車やモバイルフォンのナビゲーションシステムなどが普及するにつれ、その由来が忘れ去られようとしている。大雑把に言えば、80歳代の方々が記憶しているぐらいのものである。

そこで地元の方の協力を得て、今後、その発掘を少しずつおこなってゆく。その際、故事来歴に詳しいキーパーソンへの聴き取りはもちろん、社会福祉協議会 —— 結の里 —— の協力を得て、各地にある支所のディサービスに訪れてくるご高齢の方々に、一種の「回想法」、それも社会的かつ文化史的な意義のある形で「回想」していただくプロジェクトを開始しており、COVID-19の猛威が終息し次第、活動を再開する予定である。

おわりに —— 「FEC自給圏」の成立へ向けて

1）FEC自給圏

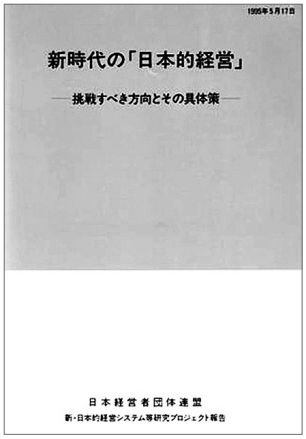
本稿の冒頭部において、内橋克人が提唱した「FEC自給圏」なる用語を紹介した。具体的かつ簡潔に記すと例えばこうなる[8)]。

> 経済評論家・内橋克人さんは、弱肉強食の市場原理至上主義（新自由主義）が、地域社会の衰退や貧困、社会の分断をもたらしてきたことに警鐘を鳴らし、「人と人とが共生する経済＝理念型経済」への転換を訴えてきました。その基本となるのが、「FEC自給圏」を目指す地域づくりです。FEC自給圏とは、食糧（Foods）とエネルギー（Energy）、そしてケア（Care＝医療・介護・福祉）をできるだけ地域内で自給することが、コミュニティの生存条件を強くし、雇用を生み出し、地域が自立することにつながるという内橋さん。グローバル経済の荒波の中で、地域にFEC自給圏をつくっていくことの意味について、うかがいました。

QR12　FEC自給圏

周知のごとく戦後50年、バブル経済が破綻してから5年ほどたった1995年5月11日、日本の経済界より、『新時代の「日本的経営」—— 挑戦すべき方向とその具体策 ——』なる書が公刊された。内容は企業の再構築（restructuring）で、主として低コスト化、人件費の削減、終身雇用制の削減、年功序列制の廃止、さらには省庁による護送船団方式の廃止すなわち「規制緩和」などを打ち出したものである。またここでは、年俸制、非正規雇用制の導入も明示されている。いわゆる「新自由主義型経済」への移行計画書であり、現実問題として日本社会は、このように再構築されてきた。

Fig. 4　新時代の「日本的経営」



そして当初よりこの方向のもたらしうる格差社会や無縁社会の到来、さらにはグローバリズムとの連動による食料・エネルギー自給率の低下を危惧した1人が内橋であり、そこで提唱した「もう一つの別の（alternative）」経済の在り方、それが一定限の地域において食料（Foods）、エネルギー（Energy）、そしてCareを「地産地消」して廻す「FEC自給圏」という考え方である。ただし最後のCareに関して、医療よりは介護や支援などを前面に出

し、human Careとした方が、現時点ではより適切と筆者は考える。

というのも、南三陸町に話をもどすと、「被災者生活支援員制度」およびそれが発展した「結の里」のように、生活のプロがその地で暮らす人びとと一個の人間（ヒューマン）として付き添う面を重視したいからである。

2）バイオマスプラント ── Foods、Energyの地産地消

先に「戸倉っこ牡蠣」について紹介した。これは「森と海の関係を改善するため」と述べたように、自然との共存の仕方を改善することにより、Foods収獲の持続可能性を高めようとする考え方が基盤にあることは指摘するまでもない。また森と海とのあいだには人の住む里がある。「うみさとファーム」のように、山・森・里・川・海と人との共存が目指されているのである。

そして南三陸町においては、バイオマスプラントによって生ゴミを液体肥料とメタンガスに変えるという仕組みを形成し発展させつつある。その原動力であり最初の成果の1つが、「めぐりん米（まい）」である。この名称自体は以前から考えられていたが、商標登録されたのは2021年度になってのことで、右のような可愛いキャラクターも作成されている。描いたのは、志津川地区の鎮守、上山八幡宮にて禰宜をつとめる工藤真弓さんである。

Fig. 5　めぐりん、メタン

生ゴミをバイオガスプラントによって発酵させ、生成される液体肥料を田畑に散布する。そうして米野菜というFoodsをめぐらせる、その1つが「めぐりん米」である。そしてその生産者となっているのが、先の花見山プロジェクトに登場した、楽農家を自称する勝善さんである。たとえば2021年11月6日に開催された「里海カンファレンス2021 in 南三陸～里海里山ひとつながりのマンダラに学ぶ～」の12頁にて紹介されている。

QR13　里海カンファレンス

また上記報告書の同じ頁に、アミタホールディングス（株）が登場しているが、同社は大規模なバイオマスプラントを建設稼働させている。そしてそれを軌道に乗せるため小さな発酵槽を「結の里」の駐車場などに設置し、復興公営住宅の住民たちが自発的に生ゴミを持ち寄りタンクに投入するシステムの有効性を実証する実験をおこない、その際に住民たちとアミタ社とを繋ぐ上で大きな役割を果たしているのが、北の恋人岬を開設した佐藤良夫さんである。

さらにFECのうちEnergyに関しても、生ゴミを発酵させて生ずるメタンガスを燃焼させてタービンを回して発電している。また、やがてはバイオ技術によって水素を取り出すといったことも考えられる。すなわち被災地はいずこも同じであるが、甚大な災害を被った地であると同時に、日本さらには世界の抱えるFECを筆頭とする諸問題の解決への糸口をさぐる先進地域ということにもなる。またそのさい、「関係人口」の考え方を取り入れることによって、人口が減少

する方向にある日本にとって、他の地域と住民を取り合うのではなく、人びとがぐるぐると廻り合う、まさに「めぐりん米」の仕組みも今後、大きな意義をもつようになると思われる。

注

1）東日本大震災復興支援プロジェクト『いのちの尊厳のために～東日本大震災復興支援プロジェクト 10年間の記録～』立教大学コミュニティ福祉学部、2021年3月、pp. 99-109。

2）日本国語大辞典第二版』小学館 ――〔　〕内は筆者が加筆。なお同辞典によると、日本文学史におけるこの語の初出は、細井和喜蔵(1925)『女工哀史』改造社である。

3）コミュニティガーデンに関しては、たとえば新保奈穂美（2015)「我が国の都市型農園と農的活動の変遷に関する研究」東京大学大学院新領域創成科学研究科博士号申請論文、さらにその人間の生における意義については、拙論（2009)「土と植物のリズムを取り戻そう」大夛賀政昭・河東仁・空閑厚樹・佐藤太編著『つながる喜び ――農的暮らしとコミュニティ ――』現代書館を参照されたい。ちなみに後者において、筆者がキャンパス内での畑づくりに先立ち、埼玉県小川町において展開した、「お米づくりと人の輪づくり」プロジェクトの概要を記している。

QR14　新保論文

4）本間照雄（2018)「被災住民が担い手になった生活支援員（LSA）とコミュニティづくり ―― 宮城県南三陸町被災者支援の事例から ――」『社会学年報№47：特集　大震災被災地における地域社会の再編』東北社会学会。

QR15　本間論文

5）このパンフレットを作成するにあたって、科学研費「基盤研究（B）（一般）」（代表、弓山達也工業大学教授）の助成金を用いた。

6）このパンフレットを作成するにあたって、同じく科学研費「基盤研究（B）（一般）」（代表、弓山達也工業大学教授）の助成金を用いた。

7）「関係人口」については、たとえば、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局／内閣府地方創生推進事務局(2020)「関係人口の創出・拡大について」を参照されたい。

QR16　関係人口

8）内橋克人（2016)「いまこそ「人と人とが共生する経済」への転換を」NHK地域づくり情報局。